

W. S. Pitcher 教授の死を悼む

産総研 特別顧問 石原 舜 三

H. H. Readの愛弟子であり、ウォリー(Wally)の愛称で親しまれたリバプール大学のWallace S. PITCHERが2004年9月4日(土)、リバプールの病院で亡くなった。享年84歳であった。葬儀は9月14日にLandican共同墓地で非宗教的に行われ、共同研究者を代表してJohn Cobbing、弟子のD. H. W. Huttonが彼の業績を紹介し、想い出と共に追悼を行ったそうである。

ウォリーは花崗岩研究の第一人者であって、同氏が晩年に記した花崗岩研究の総括書「花崗岩の成り立ち—その性質と成因」は田中久雄らによって邦訳されており、彼の名は日本にも広く知られている。本書の前書きによると彼は化石収集に興味を持っていたが、当時、ロンドンのImperial Collegeで教えていたH. H. Readに面接の後、即座に花崗岩を研究テーマに選んだとある。H. H. Readは揮発性成分を媒体とするイオン拡散によって、堆積岩などから花崗岩が生成するという“花崗岩化論者”であって、ウォリーもその流れに沿って研究したが、後にマグマティストに転向した。

ウォリーは2つの著名な研究業績を残した。一つはアイルランドの北西海岸ドネガルの花崗岩体の構造解析で、花崗岩マグマが母岩の走向断層活動期に断続して貫入し、その板状岩体を形成したことを明らかにした。第二はペルーの巨大な海岸バソリスを弟子やJ. Cobbingと共に、10年以上もかけてマッピングしたことである。その研究により巨大なバソリスは組織や岩質が異なるセグメントに分かれることを見出し、個々をスーパーユ

ニットと呼んだ。またバソリス最頂部の貫入様式、花崗岩と火山岩との関係を明らかにした。

友人のJohnによると、亡くなる3週間前にウォリーから電話を受け取ったそうである。その時彼は医者から癌である告知を受け、死に対する覚悟をするように言われたと、普段と変わらぬ声ではっきりと話したと言う。その後の余りに早い死がJohnはまだ信じられないと言う。ウォリーが残した花崗岩に対する見方、考え方は、訳書によって広く日本の花崗岩研究者にも受け継がれており、次の世代に生かされることであろう。ご冥福をお祈りする。



シエラネヴァダ山地におけるペンローズ会合のウォリー(右)と後にアメリカ地質調査所所長を勤めたダラスベック(1978年9月撮影)。

遺著紹介

A master class guide to the Granites of Donegal

W. S. Pitcher and D. H. W. Hutton 著
Geological Survey of Ireland
A4版, 97頁, 1:63360地質図付
2003年発行, 定価 EUR 20

W. S. Pitcherの最大の業績の一つであるドネガルの花崗岩研究が色刷り地質図(1:63360)として出版された。同地は国際的にも有名な巡検コースであるため、ウォリーと弟子の研究にその後の定量データを加えた巡検案内書の形でアイルランド地質調査所が出版したもので、花崗岩研究を志す者には必携の書であろう。(石原舜三)